

Association for Asian Studies (AAS 2023) 学会 参加報告

(2023年3月16日～19日、アメリカ・ボストン)

レティツィア・グアリーニ

法政大学 国際文化学部 国際文化研究科 専任講師

2017年度奨学生

この度、渥美国際交流財団の「博士号取得者の海外学会派遣プログラム」のご支援をいただき、アメリカで開催された2023年のAssociation for Asian Studies (AAS 2023) 学会に参加することができました。感謝申し上げます。

今回参加した Association for Asian Studies (以下 AAS) は、アメリカにおけるアジア学会の中で最も規模が大きい学会です。毎年開催され、今回は3月16日から19日にかけてボストンで開催されました。イタリアに帰国することを除けば、5年ぶりの海外滞在となりましたが、いわゆるノーイースター (nor' easter)、この時期にアメリカ合衆国の北東部を襲う嵐の影響で予定より一日遅れてのボストン到着となりました。早速ボストンならではのトラブルに遭遇し、改めて「異国に来たんだ」という感覚を嵐を通して感じることができ、ドキドキワクワクしました。

2017年度ラクーンの私は、2021年にお茶の水女子大学の人間文化創成科学研究科で「人文科学」の博士号を取得し、日本現代文学とジェンダー研究を専門にしております。今回の AAS 2023 学会は、ラクーンのフリアナ・ブリティカ・アルサテさん(2015年度ラクーン)に声をかけていただき、「Transnational Feminisms, Translation, and Women's Voices in Japanese Literature」というパネルで発表しました。元々トランスナショナルフェミニズムにも、翻訳にも、女性作家の声というテーマにも興味を持っていましたが、このパ

ネルに参加するにあたって今まであまり読んだことがなかった作家、須賀敦子について調べることになりました。そして「A Transcultural Journey between Italy and Japan: Translation and Gender in Suga Atsuko's Works」というテーマで須賀敦子文学における日本とイタリアについて発表する機会をいただきました。そこで初めて須賀敦子という素晴らしい作家に出会え、自分にとって異国で暮らす意味、母語でない言葉で書く楽しさと辛さ、あるいは外国語から母語に戻る時の心地よさ、また二つ以上の言語の間で常に泳ぎ続けるために必要なしなやかさについて考えることができました。AAS 2023 学会に参加することはもちろん、須賀敦子について調べるきっかけを作ってくださったフリアナさんにも感謝申し上げます。



須賀敦子(1929年～1998年)は、翻訳者とエッセイストとして知られています。川端康成や谷崎潤一郎など、日本近代文学の正典(キャンノン)と

されている作家をイタリア語に訳しました。また、ナタリア・ギンズブルグ、アントニオ・タブッキ、ウンベルト・サバなど、イタリアの偉大な現代作家を発見し、日本語に訳したことで有名です。1950年代後半から長年イタリアで暮らし、当時のイタリアの出版界と深い繋がりを持ち、日本文学の数多くの作品をイタリア人読者に紹介しました。それにもかかわらず、イタリアでは彼女の名前があまり知られていません。せいぜい大学で日本文学を勉強している学生たちが聞いたことがある程度です。一方、日本ではイタリア文学の翻訳家としてだけでなく、エッセイストとしても愛され続けている作家です。61歳のやや遅い作家デビューでしたが、1990年に『ミラノ霧の風景』が刊行され女流文学賞を受賞してから、多量のエッセイを書き、日本とヨーロッパとを繋ぐ架け橋のような存在となったのです。



AAS2023 学会では、須賀敦子のイタリアと日本での暮らしを紹介しつつ、『ミラノ霧の風景』（1990年）、『コルシヤ書店の仲間たち』（1992年）『ヴェネツィアの宿』（1992年）、『トリエステの坂道』（1995年）などのエッセイを中心に、ジェンダーと翻訳とバイリンガル文学について発表しました。特に須賀とイタリアの作家ナタリア・ギンズブルグとの関係を分析し、須賀がギンズブルグの文学を読み、翻訳することによって、自身

の作家性をどのように形成していったかを探ってみました。そして、イタリア人の日本文学研究者であり、翻訳家である私の立場から考察し、須賀の人生と作品は、今日のイタリア人読者にとって何を意味するのかという問いを投げかけてみました。

これからも須賀敦子の作品を研究し続け、イタリアをはじめとする海外の人達に彼女のシンクレティズムと、異文化の知識と尊重を通じて言語の障壁を克服する能力を知ってもらいたいと思います。